

内海・本土近接型離島における子育ての展望
～岡山県笠岡市真鍋島・六島での調査・活動を基に～

有 岡 道 博

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第63号抜刷）

内海・本土近接型離島における子育ての展望 ～岡山県笠岡市真鍋島・六島での調査・活動を基に～

Childcare on a Remote Island: A Report on Fieldwork in Manabesima and Musima

有 岡 道 博

日本では高度経済成長期以降、少子高齢化や核家族化の進展により地域コミュニティの衰退は進み、地域の子育て力は乏しくなっている。しかし、先行研究を見ると、離島にあっては、地域が子育てを行なう力をいまだ維持している例が多く見られる。

そこで、2013（平成25）年より、内海・近接型離島^{〔1〕}である笠岡市真鍋島と六島で子育て環境について現地調査を行い、その結果から導かれた課題に対して、解決を目的として子どもや住民との交流活動を行ってきた。子育て環境の現状とそれを補完することを目的とした活動について考察する。

キーワード：内海・本土近接型離島 子育て環境 子育て交流活動 アクションリサーチ

1. はじめに

日本では高度経済成長期以降、少子高齢化や核家族化の進展により、これまで地域を支えてきた地縁や血縁による関係性が希薄化し、地域社会の衰退を招いた。現在、日本各地で地域コミュニティの衰退は進み、地域の子育てに対しても大きな影響を及ぼしている。特に新聞記事などでも取り上げられているように、子どもに対する凶悪事件も頻発し、地域の安全・安心が脅かされている。

先行研究を見ると、離島にあっては中山間地であるにも関わらず、安心安全な子育て環境があり、地域の子育て力を保持し、合計特殊出生率も高いことが報告されている^{〔1〕}。そして、これらの離島は、鹿児島県、沖縄県にある外海型離島が大半である^{〔2〕}。しかし、内海・本土近接型離島での子育てについての研究はなされていない。

そこで、内海・本土近接型離島である真鍋島と六島に着目し、2013（平成25）年より子育て環境について

研究を開始した。その成果をまとめて2016（平成28）年に第一次の報告を行った。^{〔2〕}今回は、2015年に実施した真鍋島での悉皆調査（全数調査）と第一回の報告書で述べた課題に対する対処方法としての子育て交流活動を中心に報告する。

今回は個別面接での聞き取り調査を中心に、保護者と子どもを対象として時間を空けて複数回行った。その中から、子どもと家族の状態や家族の側から見た島の環境もある程度はうかがい知ることが出来た。しかし、地域の主体である子どものいない島の住民については、調査することが出来ていなかった。そこで、地域で子育てを見守り、時に、家族や子どもを支える島の住民を対象として、子育てに対する考え方、子どもを取り巻く地域の実情を知るため、真鍋島で悉皆調査を計画・実施した。

また、前回の調査結果から島では、室内でのTVゲームが少なく、「ごっこ遊び」などの外遊びが多く、地域の人たちとのかかわりの中で、見守りを受けながら

遊ぶことができていることが分かった。しかし、子どもの数が少なく、集団遊びやチームスポーツの機会が少なく、さらに、高校生、大学生、20代の大人がほとんどおらず、年齢の近い若者との交流が出来ていなかった。^[3]そこで、美作大学の学生を中心として島を訪れ、子育て交流活動を計画・実施した。

2. 目的

悉皆調査を行ない、真鍋島の住民の子育てに関する考え方や生活課題に付いて知る。また、前回調査の課題を基に、子育て交流活動を行い、島の持つ子育て力を高める。

3. 方法

1) 悉皆調査

①調査期間：2015（平成27）年11月28日～29日

調査対象：真鍋島の全世帯134世帯

調査方法：訪問面接調査（他計式調査）

不在の場合は留置き調査（郵送にて回収）

調査内容：基本的属性 地域での子育てについて
地域の課題について

2) 交流活動

期間：2016年6月～3月

内容：①島っ子キャンプ（北木島）

7月23日・24日

②六島ハロウィンフェスティバル（六島）

10月16日

③島のクリスマス in まなべ（真鍋島）

12月18日

④スポーツ大会 in 六島（六島）

2月25日

4. 調査地の概要

岡山県の西南端、瀬戸内海の中程に位置し、岡山県の西部、笠岡港から31km（真鍋島）、33km（六島）の距離にある。笠岡諸島の南端であり、香川県との県境に接し、まさに瀬戸内の真ん中、県境の島である。

1) 真鍋島

・面積：1.65km² 周囲：8 km

- ・総人口：230人 世帯数：134世帯（平成27年笠岡市）
- ・社会資源：笠岡市立真鍋小学校、笠岡市立真鍋中学校、笠岡市立真鍋保育所、デイサービス・うららの家、公民館、診療所等
- ・高齢化率：63.4%（平成27年現在）
- ・義務教育を受けている子どもの数：12人（6世帯）
- ・産業：主産業は、漁業、観光である。近年、漁業では海苔の養殖が盛んである。
- ・交通：定期船が約2時間ごとに運航し、海上タクシー等もある。笠岡港からの所要時間は、約1時間。

2) 六島

- ・面積：1.02km² 周囲：4.4km
- ・総人口：77人 世帯数：34世帯（平成27年笠岡市）
- ・社会資源：笠岡市立六島小学校、笠岡市立あゆみ園（保育園）、公民館
- ・高齢化率：58.4%（平成27年現在）
- ・義務教育を受けている子どもの数：6人（2世帯）
- ・産業：主産業は、漁業、観光である。スイセンと灯台の島として有名である。
- ・交通：定期船が1日4便運航し、笠岡港からの所要時間は、約1時間。



図1. 笠岡市の位置

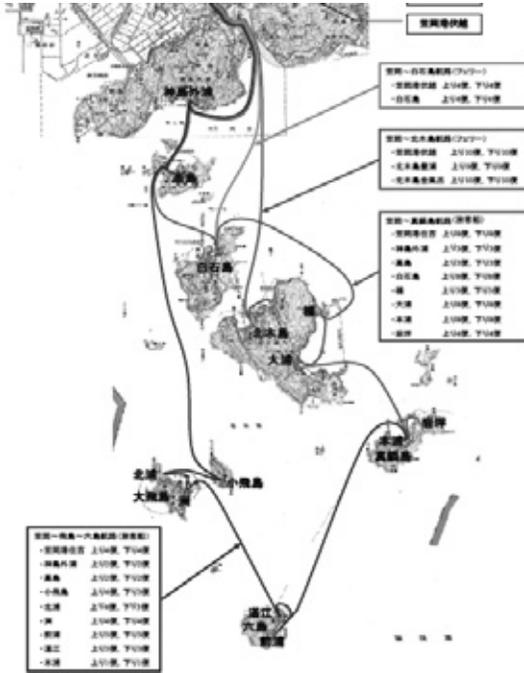
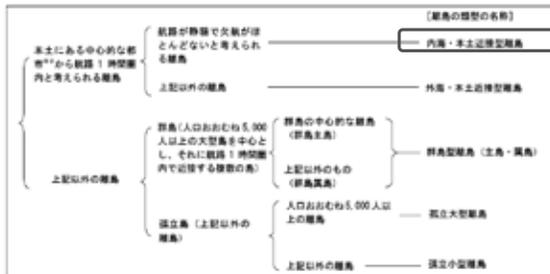


図2. 真鍋島・六島の位置

3) 離島の類型

日本は、6,852の島々の存在により構成される群島国家である。6,852島のうち本土と呼称される北海道、本州、四国、九州、沖縄本島を除く6,847の島々が離島と呼ばれる。そのうち定住者のいる418島を有人離島、定住者のいない6,429島を無人島と言う。離島は存在する位置、本土からの距離、人口規模によって5つの類型に分類する事ができる(表1参照)^[4]。今回の調査対象地である岡山県笠岡市真鍋島と六島は、内海・本土近接型離島に分類される。

表1. 離島類型



5. 調査結果

訪問確認した家屋は、411軒に上り、そのうち34世帯について面接調査を実施することができた。また、11世帯では残念ながら調査にご協力いただけなかった。居住はしているが留守と思われるお宅66世帯は、調査票と返信用封筒を留置した。また、常時居住されていないとみなした家屋は、300軒(約73%)あった。判断基準は、2015(平成27)年施行の「空き家対策特別措置法」による空き家の定義を用いた。この法律で総務省と国土交通省は、初めて空き家を「居住その他の使用がなされていないことが常態である」というもので、その常態の期間としては1年間で認められると定義した^[5]。

1) 回答者数と回収率

郵送での回答数11件を含めると、全体で45件の回答があり、回収率は33.6%であった。

表2. 回答者数と回収率

回答者数	回収率
45	33.60%

2) Q1回答者の年齢

回答者は女性が多く、平均年齢が72.7歳であり、高齢者が中心であった(図3参照)。常時居住している方がほとんどで、1名の時々帰宅する方がおられた。

3) Q3回答者の世帯構成

単独世帯が多く、同居の家族数は2人が一番多く、続いて単独世帯になっている(図4参照)。高齢者がいる世帯は、38世帯で、全体の約86%となっている。世

(N=45)

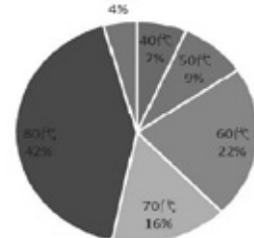


図3. 回答者の年代別人数の割合

帯あたりの子どもの数は割と多くなっているが、実際に同居しているものは9世帯、20%に過ぎない。

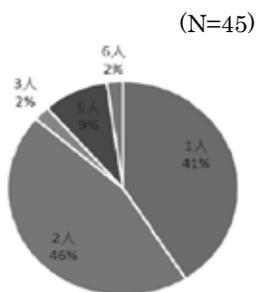


図4. 同居の家族数の割合

4) Q3 高齢者のみの世帯

高齢者のみの世帯数は、32世帯に上り、約73%を占めている。さらにその内、単身の高齢者（独居老人）は18世帯おり、高齢者のみの世帯の半数以上を占める。

5) Q3 島外に家族のいる世帯

島外に家族のいる世帯は32世帯（73%）に上り、何らかの支援を期待することが出来るが、残りの12世帯（23%）は支援を受けることが難しい。

6) Q4 子育てで気になることは何ですか？

「高校への通学」が一番で、「交通の便」、「病院」、「子どもの数」の順にあげられている（図5参照）。ほとんどの気になることに共通して影響しているのは、船便の少なさと船賃の高さである。子どもは高校への進学を境として、本土での生活が始まり島へ帰ることは少なくなる。また交通の便は通学だけでなく、買い物や通院にも影響しており、診療所の開所日数の増加も含めて「病院」という項目があがっている。「子どもの数」は、将来の人口減少に直接結びつくものであり、緊急の課題となっている。

7) Q5 他人の子育てを手伝った経験がありますか？

他人の子育てを実際毎日手伝っていた経験がある人は7%と少なかったが、「時々ある」まで加えると33%になり、約3分の1の人が何らの形で子育てを手伝っ

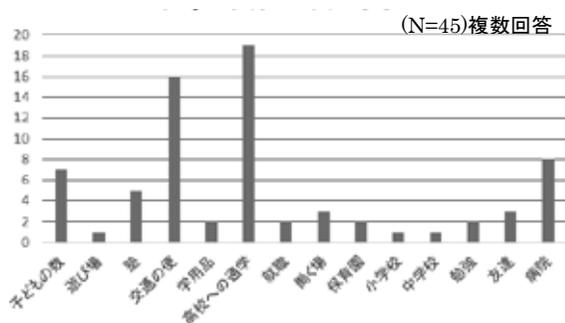


図5. 島の子育てで気になること

ていたことになる。地域による子育てが、島ではできていたということが言える。

8) Q6 島の子どもと会うことがありますか？

毎日会っている人は、22%、時々会う人を含めると58%もの人が他世帯の子供にあってることになる。そのため子どもも大人も顔見知りとなり、子どもに注意することも可能となる。

9) Q7 子どもに挨拶をしますか？

毎日挨拶をする人が35%もおり、「時々する」を入れると86%の人が挨拶を行っている（図6参照）。本土では他人に挨拶をしない子どもも大人も多くいるが、人口の少ない島ならではの現象だと思われる。

また、子どもたちと会っていないにもかかわらず、挨拶をしている人もいるが、登校途中に離れたところから声をかける行為（例えば畑や船の上にいるときが想定される）もカウントされていると考えられる。

10) Q8 子どもと話すことができますか？

他世帯の子どもと話すことはさすがに少なく、「毎日」が9%で、「時々する」を含めると37%になる。しかし、本土と比較すると、3分の1以上の人が、他世帯にもかかわらず話をしたことがあるということはとても素晴らしい。地域の他人の子どもに対する関心の深さを裏付けている。

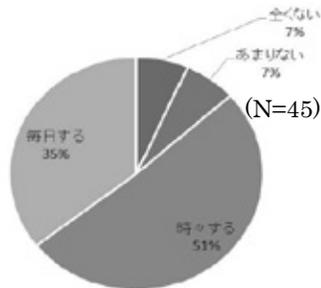


図6. 子どもとの挨拶の有無

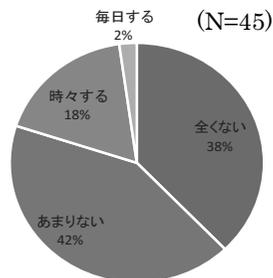


図8. 親と子育てについての会話の有無

11) Q9子どもの親と会うことがありますか？

「毎日会っている」が22%、「時々会う」を入れると66%の人が子どもたちの親に会っている(図7参照)。子どもとのかかわりも厚いが、その親ともかかわりがあり、地域の絆(ソーシャルキャピタル)はとても強いことがうかがわれる。

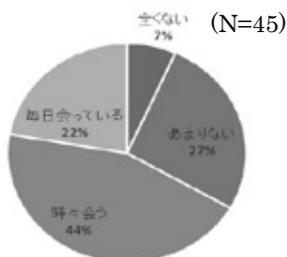


図7. 子どもとの親とのかかわりの有無

12) Q10親と子育てについて話をすることがありますか？

「毎日する」が2%、「時々する」を入れると20%、2割の人が子育てについて意見を交わしている(図8参照)。他人の子育てについては干渉しないことが不文律になろうとしている本土と比較すると、とても大きな数字となっている。地域で子供を育てていることの大きな根拠となっている。

13) Q11現在、または将来困ることがありますか？

経済的なものも含め、船便が不便ということが一番にあげられている。続いて、買い物をする店もなく、買い物の足も不便なことがあげられる。医療に関する不安は、病院、医師の不在、通院があり、まとめれば

一番困っていることと思われる。「買い物」、「医療」、「船便」が大きな課題となっている。

注目すべきは、「特にない、今の生活に満足」と回答した人が8人もいたことである。仕方がないと諦め、現状に満足しているということであろうか。

14) Q12現在一番島に必要なものは何ですか？

現在のニーズとしては、お店(コンビニを含む)が一番多い(図9参照)。毎日のことでもあり、より新鮮で多様なメニューを望まれているのであろう。2番目は、若者であるが、これは切実な問題でもあり、将来の島の存続をも左右する。3番目は、やはり医療関係で、高齢者の多い島でもあり、大きな問題でもある。

ここでも注目すべきは、「特にない、今の生活に満足」と答えた人が5人もいたことである。我慢強く、現状

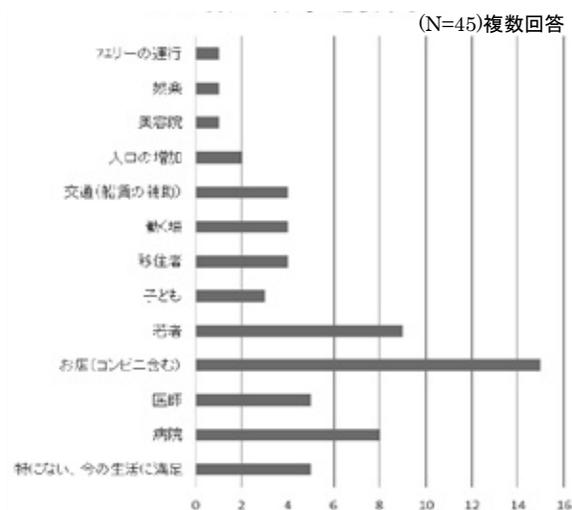


図9. 現在一番島に必要なもの

を受け入れることができる人達がいるということである。

15) Q13他の島とのかかわりがありますか？

他の島とのつながりは、あまりないように感じられる。仕事関係や島の運動会（年1回）でかかわることはあっても、日常的なかかわりは薄いといえる。

6. 活動結果

1) 島っ子キャンプ（7月23日・24日）

①参加者（46名）

- ・子ども16名（高島4名、真鍋島6名、六島6名）
- ・保護者4名・島の大人9名
- ・学生17名・教員1名

②目的

自然の中でキャンプを行うことを通して、他島の子どもや大人との交流を行い、集団活動の場を提供する。

大学生との交流によって新たな交流や学びの場を体験する。学生が子どもたちと交流する間、他島の保護者同士の交流の場を提供する。



図10. キャンプのポスター

2) 六島ハロウィンフェスティバル（10月16日）

①参加者（57名）

- ・子ども13名（真鍋島7名、六島6名）
- ・保護者5名・島の高齢者など島民30名
- ・学生8名 教員1名

②目的

仮装することによって島の子どもたちとハロウィン楽しみ、お菓子作りを行なう。

出来上がったお菓子とメッセージ持ち、仮装して島の全戸（ほぼ高齢者の方）を訪問し、お菓子を配布す



図11. ハロウインのポスター

ることを通して子どもの社会性を養い、あわせて島の活性化を図る。

3) 島のクリスマス in まなべ（12月18日）

①参加者（38名）

- ・子ども14名（六島6名・真鍋島8名）
- ・保護者5名・小学校教員1名
- ・高齢者6名
- ・学生11名・教員1名

②目的

子どもたちとともに、ケーキ作りやツリーの飾りつけなどをする事を通して、子どもたちに集団活動の機会を提供する。

音楽会に高齢者を招待し、ケーキを贈ったり合唱をしたりすることにより社会性を養う。

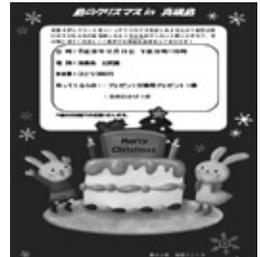


図12. クリスマスのポスター

4) スポーツ大会 in 六島（2月25日）

①参加者（33名）

- ・子ども11名（真鍋島5名、六島6名）
- ・保護者6名・小学校教員2名
- ・学生14名・教員1名

②目的

多人数でのスポーツ活動を通し子どもの社会性を養うと共に、高齢者でも参加できるプログラムを盛り込むことによって、地域活性化に貢献する。



図13. スポーツ大会のポスター

7. 考 察

1) 悉皆調査について

400戸あまりの家屋を訪問してみて、空き家とみなされた家屋の多さに驚かされた。まだ住めるきれいなお宅だが、たまにしか帰ってきてないと思われるような家屋がたくさんあった。その反面崩れかけているよ

うな家屋もあり、危険を感じるもの、明らかに居住されていないと分かるものもたくさんあった。特に山際や標高が高いところに多く見かけられ、廃屋となり取り壊しが行われているものもあった。空き家対策が今後の島の生活に及ぼす影響は大きい。

また、回答者の世帯構成、年齢を見ても将来の困難さが想像される。急激な人口減、介護の増大、様々な生活上の問題が押し寄せてくると思われる。現在から準備を心がけていかななくてはならない。

そして、アンケートにより島の子育て力の健在さが確認できた。挨拶などの子どもとのかかわり、母親との子育てに関する会話など、まさに地域の子育て力の具体例である。このような地域社会が、子どもたちの積極性や自律性の発達を支えているといえる。

「Q11現在、または将来困ること」と「Q12現在島に一番必要なもの」の回答は異なった。聞き方が「あったらいいな」という玉手箱式なニュアンスが後者の質問に含まれたためと思われる。回答もお店（コンビニ含む）が一番であった。前者は、切実な船賃・船便の不便さが一番に挙げられていた。とにかく、「交通が不便」（金銭的にも）、「買い物が不便」、「医療が不便」というこれまでの離島の調査でよく取り上げられている課題が、数字的にも裏付けられた。

特に注目すべきは、「特にない、今の生活に満足」と答え、3つの不便をあまり感じていない人がいることが確認できたことである。ほとんどが60代前半で、退職後島に帰ってきたUターンの高齢者予備軍の人に多かった。まだ健康で体が動き、自家用船で笠岡へ行くことも苦にならないような人達であり、余裕が感じられる。しかし調査対象者の大半は後期高齢者が多く、体も不自由になり、船賃をはじめとして様々な生活上の困難を感じている。また若い世帯にしても、子育ての問題に関して多くの課題を抱え、島の子育て力の将来については決して楽観していない。この現状認識のずれ、課題の放置はどこから来るのであろうか？原因を何かに転嫁し、主体的に向き合っていないことが一番本質的な課題だと思う。

2) 子育て交流活動について

活動の実施を通して、子ども達や保護者と話し合う機会も多く、本土に比べ子どもたちの社会性・自律性が発達していることが確認できた。その反面、子どもが子どもとして成長する期間が短く、集団性やリーダーシップが育ちにくい環境となっている。また、成功体験、自己効力感を得る機会も限られている。子どもらしく遊ぶことが十分できず、年齢の近い若年世代と関わる事も少ない子ども達は、妙に大人びた社会性を身につけている。学生達とのかかわりの中で、島に欠落している18歳以上の若い世代との交流体験が持て、遠慮することなく力を出し切って学生にぶつかっていく姿が見られた。学生にとっては、改めてこの活動のやりがいの一つを見出す事ができた。活動に参加した学生は、「島にまた来たい」「子ども達と遊びたい」と感じており、昨年度と比べると参加する学生の数やリピーターが増えてきた。学生の中で島の魅力が認識されているといえる。

子どもたちは、自然豊かな島の生活の楽しさを十分理解できているが、また、生活の不便さも感じている。将来への不安が大きく、学生からの「将来は島に帰ってくるの？」と言う問いかけに、「分からない」、「いいえ」と答えることに繋がっていると考えられる。本土の子ども達が将来について悩むはるか以前、島の子ども達は小学校高学年で悩んでおり、不安を感じている。それが大人びた言動や行動に反映されている。将来について話す場、職場体験、大学訪問なども必要とされる。

島の子ども達は、住んでいる島や小中学校が異なってもすぐ打ち解けて遊ぶ事ができており、人間関係の形成について優れているといえる。島には危害を加える人、不審人物などがいないためだと考えられるが、逆に本土に渡った後の生活面での安全性に危惧を覚える。

島の高齢者や住民の方は、本土に比べ子ども達とよく関わっているといえるが^[6]、子ども達自身の発案によるかかわりは少なく、島の祭りや行事、学校教育上のものが多くなっている。これらの活動では、子ど

もの数が少なく子ども自身の負担感が増しているが、高齢者や住民は、子ども達の自主性を大切に意見を取り入れ、交流をおこなってきている。上からではなく、子ども達自身で考え計画実行する機会が求められているようだ。

島の中で活動する事によって、島の人たちに刺激を与えると共に人間関係を深め、島内の人たちだけでなく島同士、また本土の人との結びつきを深めていく事が大切であると考え。そのため今回の活動では、島（地域）の中で子ども達や保護者と共に考え、活動しながら調査をする「アクションリサーチ」⁽³⁾の視点を意識して活動を行ってきた。

子ども達は、親御さんも驚かれるほどの集中力を見せたり、より積極的な活動への参加、リーダーシップの発揮、学生との人間関係の深化が見られるようになってきた。保護者についても、行事の裏方を買って出たりと積極的に協力してくださる姿勢が多く見られた。そして、より活動を進化させるためにも、学生達とじっくり話す機会を求めてこられるようになった。なにより、回数を重ねるうちに、住民の方や高齢者の方があたたかい目で見ていただけるようになってきている。

3) 支援活動の方法論から

① 足し算の支援について

地域支援には「足し算の支援」と「掛け算の支援」⁽⁴⁾があるとされている。地域力がマイナスの状況では、掛け算的に支援をしても地域の状況はマイナスにしかならない。まずは住民の不安や悩みによりそい、共に行動をするような人材を送り込む足し算的に支援し、地域力をプラスに戻した上で、掛け算的な支援を行えば地域力はより高まるという理論である。⁽⁶⁾ 足し算の支援には、ポイントが三つあり、一つは外の人の関与、二つ目は成功体験を重ねること、三つ目はその体験をある程度の数の住民が共有して共通認識にすることである。

対象地の真鍋島と六島は、過疎や高齢化が進みソーシャルキャピタル（社会関係資本）にほころびが開始

めている。いきなり外部からの移住や事業の誘致、起業を計画しても、じゅうぶんな効果が期待できるとは限らない。それを補っていくためには、上記の足し算の支援、すなわちソーシャルキャピタルへの支援が必要とされている。

そのため今回の活動においては、島外の人の関わり、学生の関わりが必要であり、単発型の行事を繰り返して、一回毎に完結でき達成感が味わえるよう企画した。また、子どもだけを対象にするのではなく、高齢者の参加できる内容も設定し、活動の成果を島内に配ったりして、住民と共有できる事を目的とした。

② よそ者、若者、ばか者について

また、関満博の「よそ者・若者・ばか者」を積極的に活用する地域支援もある。地元の気づかない視点でその地域のよさを発見する「よそ者」。若さを持ち大きな活力となる「若者」。馬鹿になって真剣に打ち込んでくれる「ばか者」。この人たちが地域活性化の大きな戦力となる⁽⁷⁾。

学生はこの考え方の「よそ者・若者・ばか者」いずれにも合致しており、真鍋島と六島に対する地域支援の大きな力になる。島のことを知らずに初めて足を踏み入れる彼らは、新鮮な気つきを持っており、率直な感想を述べてくれる。

また、その若さは、子どもたちだけでなく、島の住民全てにとって魅力を持っている。学生と一緒にカラオケを熱唱する高齢者は、満足感に溢れている。漁業に従事する中高年者は、驚き感心する学生に得意げに獲物の事を話している。子ども達は、思いっきり遊ばまわることができる学生を離そうとしない。

島に行くためには1回約2000円の船賃、その上に港までの交通費もかかる。しかし、島の魅力のとりこになった学生の中には、1年間に20数回自分で島を訪ねたものも出てきた。「ばか者」といわれる程の真剣さである。真剣さは島の住民にとっても驚きであり、感心するとともに、それをもたらした島への肯定感にも繋がっている。

8. 結 論

シルクロードの名付け親のリヒトホーフェンは、幕末の1860年に瀬戸内海を訪れ、「広い区域にわたる優美な景色で、これ以上のものは世界のどこにもないだろう。将来、この地方は世界で最も魅力のある場所の一つとして高い評価を勝ち得、たくさんの人を引き寄せるだろう。《中略》かくも長い間保たれて来たこの状態が今後も長く続かんことを私は祈る。」と日記に記している^[8]。

しかし、2011（平成23）年の調査によれば、内海・本土近接型離島（123島）の内32島が「今後無人化が懸念される離島」と言われている^[9]。そして、調査対象の六島もこの範疇にある。穏やかな瀬戸内海にあるがゆえに、より簡単に本土へわたることができ、若年層にとって学習や就職のための移住、高齢者層の介護・療養のための移住を誘発し、人口減少をもたらしている^[10]。

すばらしい自然や子育て環境を持つ、この世界でもっとも魅力ある島々を保持していくためには、島外との交流、特に若者との交流を通して、足し算の支援を継続していかなくてはならない。定住や起業も大切ではあるが、若者や島外の人との交流の中で、住民が誇りを持ち、自らの課題として取り組む姿勢を見せる事が大切である。

今後も真鍋島と六島に対する子育て交流活動を継続しながら、地域社会の変化について見守り、将来を見据えた方策を提示できるよう研究を継続していきたい。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた真鍋島と六島の皆さんへ厚くお礼を申し上げます。

註

- (1) 離島振興法による離島類型の一つ。内海にあり本土の中心的な都市から1時間以内の航路圏にあるものをさす。
- (2) 日本経済新聞（2013）12月30日朝刊：日本経済新聞記事は、「市町村別に見ると、2003年～2007年に全国で最も高かったのは、鹿児島県・徳之

島にある伊仙町であり、2.42であった。伊仙町保健福祉課の美延治郷課長補佐は『徳之島には「子は宝」という格言がある。この文化が子育てに対する安心感を生み出している』と胸を張る。上位30位までを沖縄の自治体が独占し、その多くは離島や山間部だ。」と伝えている。

- (3) 地域での問題解決を目的とし、研究者が積極的に関与して調査を行い、その結果を基に地域住民とともに問題を解決していくもの。実践的研究といわれる。ドイツの心理学者レビンが提唱。
- (4) 「足し算の支援」とは、外部とのつながりを作り、小さな成功体験を重ねたり、その成果を住民全員で共有するような支援のことで、具体的には以下のような活動を指す。（地域の宝探し、マップづくり、ふるさと自慢料理づくり、ふるさと便りづくりなど）
「掛け算の支援」とは、住民が描いた夢を現実にする専門的な支援のことで、具体的には以下のような活動を指す。（定住促進、起業、外部の企業団体との連携など）稲垣文彦が提唱。

引用・参考文献

- [1] 根ヶ山光一（2012）『アロマザリングの島の子育て』新曜社、P.153
- [2] 有岡道博（2016）「離島の子育てについて～岡山県笠岡市真鍋島でのフィールドワークを通して～」美作大学・短期大学部紀要第61号、P.77-88
- [3] 前掲書、P.80
- [4] 国土交通省都市・地域整備局離島振興課総務省（2013）「離島振興計画フローアップ（最終報告）」
- [5] 空家対策特別措置法（2015）
- [6] 株式会社イケア・ジャパン（2013）「子どもとの生活に関する意識調査」
- [6] 稲垣文彦（2013）「中越地震からコミュニティ再生」復興庁第4回コミュニティ研究会
- [7] 金山智子（2008）『離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達－隠岐那賀中ノ島編－』Journal of Global Media Studies Vol. 5, P.1-18

- [8] フェルデナンド・フォン・リヒトホーフエン (2013)
「リヒトホーフエン日本滞在記」九州大学出版
会
- [9] 国土交通省都市・地域整備局離島振興課総務省
(2013)「離島振興計画フローアップ(最終報告)
- [10] 奥野一生 (1998)「離島振興政策の展開と離島の
動向」地理学評論71A-5, P.362-371